

相合傘図像の源流を探る

一井原西鶴『好色一代男』と菱川師宣『やまとゑの根元』の間

金 志賢 (日本大学)

相合傘と言えば、鈴木春信(1725年~1770年)の《雪中相合傘》(明和2年)を思い浮かべる人が多いだろう。一本の傘の下に寄り添う男女が雪の中を忍び行く道行の舞台を見るような情景は人々の心に深く記憶されたものである。以後、幕末・明治に至るまで、異性愛、同性愛を問わず、恋する二人の親密な姿を表すものとして、相合傘図は繰り返し描かれた。しかし春信以前の相合傘図像の形成過程については、まだ十分に検討されてはいない。この発表はそれを試みるものである。

その点、春信の相合傘でもう一つ注目したいのは、彼が別に、達磨と遊女とか、鍾馗と娘を組み合わせた「見立て絵」や「戯画」のようなものをも描いていることである。ということは、春信以前から元になる図像が存在し、既存の図像が思い掛けない変換によって笑いを醸し出しているのである。

それを念頭に置いて相合傘図の源流を探ってみるが、まず、芝居や川柳のような「俗」の文化に多くの事例が見出されることが確認できた。春信の絵には別に和歌などを添えた古典的な「雅」の系譜が含まれてはいたが、相合傘が歌に詠われることはなく、同時代的には芝居や川柳と並行する画題であったことが知られる。芝居における道行のクライマックスは喝采を浴びたろう。一方で西川祐信らの絵本類に見られる事例からは、川柳と軌を一にした戯画的な側面が強く感じられる。

そしてさらに遡ると、上方では浮世草子の時代、江戸では師宣や一蝶の時代になる。今回の発表で報告できる最も古い相合傘の図像がそこに出現する。まず井原西鶴(1642年~1693年)の『好色一代男』(天和2年)と菱川師宣(?年~1694年)の『やまとゑの根元』(元禄元年)である。より厳密に言えば『好色一代男』から『やまとゑの根元』への変化に鍵がある。『やまとゑの根元』は、大坂で出た『好色一代男』の江戸における焼き直し版であることはよく知られている。その両方に共通した物語で師宣の挿絵にだけ相合傘が登場する。「袖の時雨はかかるが幸い」と題した話では、少年の世之介が雨に降られ、追いかけてきた男が傘を差し掛け、やがて二人は睦み合う仲へと発展する。西鶴自筆とされる原作の挿絵では、確かに傘を持った男が走り寄っているが、世之介は知らぬげに先を行く姿で表されており、古くからある「差しかけ傘」の軀にすらなっていない。西鶴はむしろ筋書きどおりに事の発端を絵にしたわけである。ところが師宣の挿絵では、二人は早くも傘の下にあって、互いに親しげに顔を見合わせる様子が描かれており、紛れもない相合傘の図となっている。

これと同時代の英一蝶(1652年~1724年)にも相合傘図の作例があることは偶然ではないだろう。その背景には巨大都市に成長する江戸の風俗があったと思われる。調査は、絵巻、近世初期風俗画屏風を通して行うが、後者でも仕事をした師宣や一蝶が時代の境目に立っていたことが確かめられる。